



TITLE:

<研究論文>非公式の教育と人類学の
接点としての技能研究：伝承を世
代と世代の関係性という視座から
捉え直す

AUTHOR(S):

竹内, 一真

CITATION:

竹内, 一真. <研究論文>非公式の教育と人類学の接点としての技能研究：
伝承を世代と世代の関係性という視座から捉え直す. 教育方法の探究
2011, 14: 49-55

ISSUE DATE:

2011-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/190376>

RIGHT:

非公式の教育と人類学の接点としての技能研究

——伝承を世代と世代の関係性という視座から捉え直す——

竹内一真

1. はじめに

学校教育のようなフォーマルな形での教育とは異なり、伝統芸能・工芸をはじめ、OJT で伝わるような非公式の教育においては講義などで知識を伝えるのではなく、むしろ、仕事などの実践を共にすることを通じて教え手の技能や技術が伝わっていくことが知られている。

これまで教育学に関する研究の中心は学校という場においてどのように教育を行うのかということが中心に議論されてきた。そのため、一部の例外を除いて（例えば、生田（1987））これまで伝統芸能や伝統芸道などOJTで伝わるような知識や教育方法に関しては教育学の分野では十分に研究されてこなかったのである。そもそも、学校教育のようなフォーマルな形での教育システムは近代化によって達成されたものであることが指摘されている（イリイチ、1977：柳、2005）。すなわち、近代化される以前において教育は学校という公式な教育の場を離れ、徒弟制や家庭といった教育内容や教授方法が自明ではない環境において主として教育がおこなわれていたのである。

このような非公式の教育に焦点をあて、研究を行ってきた分野の一例に人類学がある。もちろん例外はあるものの、人類学では主として近代化されていない地域を対象に技能や技術の伝承などを研究してきた。無論、人類学の主たる研究のテーマは教育を分析にあるのではない。そこで、本稿では人類学において特に技能研究に焦点を当て、技能がどのように文化的に継承されてきたのかという観点から人類学研究を照射していく。

つまり、本稿では人類学を対象として技能に関する研究がどのようになされてきたのかということを取り返るものであり、その振り返りを通じて次世代への技

能の伝承という観点からどのような研究が求められているのかということを明らかにすることを目的とするものである。

2. モースの身体技法論の展開から捉える技能と伝承の関係

1. 身体技法というアイデア

人間の技能が身体に基礎付けられていることを最初に理論付け、身体技法という概念を人類学に持ち込んだのはマルセル・モースである（福島、1995：野村、1997）。モースは「人間がそれぞれの社会で伝統的な状態でその身体を用いる仕方」（モース、1976）として身体技法を定義した。ある文化においては立ったまま眠るという習慣が存在するが、このような文化に特有な眠り方やあるいは泳ぎ方、走り方といった身体動作や姿勢などが社会的に伝承され、成員が大人になっていく中で自然と習得していくものとしてモースは身体技法を捉えていたのである。「身体こそは人間の不可欠の、また、最も本来的な道具である。あるいは、もっと正確に言えば、身体こそは、道具とまでは言わなくとも、人間の欠くべからざる、しかももっとも本来的な技法の対象であり、また同時に技法手段でもある」（モース、1976）という言葉からもわかるように、モースは身体的動作を単なる動作として見ていたのではなく、人間にとって欠かすことのできない極めて重要なものとして位置づけていたことが理解されよう。

では、そもそも技法と呼びうるものと、そうでないものはどのように区別されるのか。この点に関してモースは「有効で伝承的な行為」である必要があると説く。先に、「伝承的な行為」ということを通じてモースが何を伝えようとしているのかという点を見ていくこととする。例えば、モースは第一次世界大戦中のシャ

ベルの使い方を上げている。イギリス軍がフランス製のシャベルを使うことができず、フランス製のシャベルを全てイギリス製に取り換えたということを言及しており、その上で、技法というものには個々の文化毎に伝わる型があると指摘している。

このようにモースが挙げている事例こそが身体の姿勢や道具の使い方などそれぞれの社会が歴史的に築いてきた独自の型なのであり、この歴史を通じて築き上げてきたという点を指して「伝承的」と言及しているのである。さらに、各々の社会に見られる「独自の型」のことをモースは「習慣 (habitude)」ではなく、アリストテレスのいう「素質 (exis)」「知識 (aïsis)」「能力 (faculte)」のあわさったものとしてのより社会的な「型 (habitus)」と呼ぶ。

次にモースの述べる有効性に関して見ていくことにしよう。モースが技法と呼びうるものに「伝承」という言葉を入れていることからわかるように、身体技法と教育との結び付きは極めて強いものがある。その中でも基本となるのが、模倣である。モースは学習者が模倣する対象者には学習者の模倣に先立ち、「権威のある、証明された行為をなすものの威光」があると指摘し、威光に基づく模倣を他の模倣と区別し、威光模倣と呼んでいる。さらにこの威光模倣に関して言及するならば、モースは「子供も大人も、その信頼し、又自分に対して権威を持つ人が成功した行為、また、目の当たりにした行為」であると指摘しており、社会的な権威や権力を持つ人間が行う行為を受動的に取り入れるのではなく、技能に関する有効性に学習者が価値を有するものということでコミットすることが重要であると述べているのである。

2. 身体技法と物質文化の関連

モースは身体技法の中に「伝承的な行為」の重要性を言及していたり、あるいは威光模倣を通じて身体技法を教育という側面から議論していたりするのにもかかわらず、自らどのように技能を受け継ぎ、どのように次の世代に継承して欲しいと考えているのかという世代に焦点を当て、当事者の語りに基づくような継承に伴うダイナミクスを明らかにする研究に関してはほとんど触れられていない。

近年、この身体技法の獲得プロセスに焦点を当て、

それを世代という切り口からアプローチしていく研究が表れてきている。そのうちの一つが物質文化と身体技法の関係を明らかにしようとする金子の研究である。金子の研究を詳細に見ていく前にまず、物質文化と身体技法の関係を明らかにする研究とはどのような研究のことを指すのかという点を明らかにしていく。

身体技法は一方において感情や意志を表現し、伝えるためのメディアであるとともに、もう一方において道具を媒介として環境に働きかける技術の一環として機能している。しかし、このような身体技法における道具を媒介した技術的側面に関しては、90年代以前まで十分に研究が展開されてこなかったことが指摘されている（ルロワ＝ゴーラン、1973：Lock、1993：野村、1999）。この身体技法における技術的側面に関していち早く議論を展開していた研究者に川田がいる。川田は西アフリカ、フランス、日本の三地域を対象として、鉄の鍛造や土器成形など幅広い技能を対象にその特徴を身体技法という観点から分析を行ってきた（川田、1988・1995）。川田の研究では単に西アフリカ、フランス、日本という三地域の身体技法の比較といった点だけにとどまらず、西アフリカにおいて土器製作に当たって、製作過程を安定させるためにどのように身体が使われているのかという点や、土器や織物製作に関する身体技法の差異といった側面に関しても言及を行っている（川田、1997）。

川田の研究では身体技法の差異や変化を個人の能力や価値観に帰して説明されていたのに対して、近年の新たな動向としては社会文的側面からアプローチを行うという研究が行われてきている。このアプローチをとるのが金子であり、エチオピア西南部のアリという地域を対象として親世代と子世代の土器づくりの製作場面に焦点を当て、両世代の差異を社会的な立場の変化・経済的な状況・土器の評価の仕方などから分析するというを行っている（金子、2008）。

金子の研究において非常に興味深い点はテクノ・ライフヒストリーという手法を用いて多面的に技能の変容を捉えようとする点にある（金子、2007）。テクノ・ライフヒストリーとはものづくりの生活史と呼びうるものであり、技能を有する個人を対象としてどのように習得してきたのか、習得においてどのような社会・文化的な影響があったのかを明らかにしている。金子

は親世代と子世代に対して土器づくりの技法に関してそれぞれの習得の語りを明らかにすることを通じて、土器づくりの技能がどのような変化をたどってきたのかを明らかにしようとしている。

ここまで物質文化と身体技法の関連を確認してきたわけであるが、物質文化と身体技法の関連に関して十分に研究されてこなかった理由としてたとえばインゴルドは人類学では技術に関する研究が進化論的な見方と文化相対主義的な見方の両極に分離してしまったことをその原因として指摘している (Ingold, 1997)。進化論的な見方とは技術は単純なものから複雑なものへと発展していくという一貫した傾向があり、そのような傾向は社会の構造や文化と密接な関係があるという立場である (Harris, 1968 : White, 1959)。また、一方の文化相対主義的な見方とは技術の複雑さと社会の複雑さには一切の関係はなく、そもそも個々の文化を比較し、どちらが進歩しているかを定めることはできないという立場である。

二つの立場ともに共通することとして、社会の外側に技術と社会の関係を測る客観的な構造を仮定しているという点であり、もう一点が、技能は複雑さという観点からであれば計測可能であるという立場である。

このように、進化論的な見方であれ、文化相対主義的な見方であれ、「当事者自身がどのように捉えているのか」という見方は身体技法の研究において非常に軽視されてきた。無論、このインゴルドの指摘は決して物質文化と身体技法の関係だけに終わるものではない。そもそも、世代と世代の関係性という点にアプローチするには単に技能の習得を個人の熟達プロセスを解明するだけに終わるのではなく、文化の変化という点に焦点が当たらざるを得ない。文化という点から世代と世代の関係性にアプローチをすると進化という人類学において非常にナイーブな問題に行き当たらざるをえず、それ故、身体技法全般に関して世代という観点からこれまで十分に研究がおこなわれてこなかったのである。

このような現状において、金子の研究は親世代、子世代という技能を受け継ぐ当事者の語りから明らかにし、世代ごとに重ね合わせることで、どのような変化をたどってきたのかということを明らかにする。このようにして、文化相対主義的、あるいは進化論的とは

異なった当事者の視点を取り入れた技能の変化を捉える視座を提供しているのである。

2. ブルデューのハビトゥス論の発展から捉える技能の認識論的枠組み

1. ハビトゥスとは何か？

モースによって論じられ始めたこの身体技法というアイデア自体は、身体の使い方がいかに社会によって条件づけられたものであるのかという指摘とその指摘をめぐる初事的な問題提起にとどまっていた (川田、1988)。そもそも、モースの身体技法の捉え方はあくまで技法を実行する状況や環境とは独立に抽象的な形式として捉えられているため、進行形の実践に関して十分に焦点が当てられないのである (Crossley, 1995)。

一方で、ブルデューはモースが身体技法はアリストテレスのいう「素質 (exis)」「知識 (aui)」「能力 (faculte)」のあわさったものとしてのより社会的な「型 (habitus)」であると注意した点を深化させ、独自の慣習的行動論を構築していく (ブルデュー、1988)。ブルデューにとってハビトゥスとは文化の中の規範のような枠組みではない。それは実践を持続的に産出し、組織する構造であると同時に、実践そのものに制約と限界を与えていく構造でもある (Bourdieu, 1977)。すなわち、ブルデューのハビトゥス論に従うならば、様々な技能を有する専門家のハビドゥス、例えば、その地域特有の織物製作におけるハビドゥスは、実践を通じて固有の手の動かし方や指の使い方といった技法を組織し、生み出すと同時に、その技法に制限を与えるのである。このようにブルデューのハビトゥス論ではモースの身体技法のプログラムである「身体を通じた技能の在り方を捉える」という目的を超え、文化、あるいは地域に固有のハビトゥスがどのように実践という日々のルーティンを生みだし、同時に制限を与えるということを明らかにすることに力点が置かれているのであり、それゆえ、実践という概念と切り離せないものとして措定されているのである。

では、ブルデューのハビトゥス論に従うならば、どのようにして、実践者の技能を捉える事が出来るのであろうか。ブルデューは実践者が「どのように実践を行っているのか」といった点に着目するのであるが、一方で、観察された実践を当該の文化の中における客

観的な関係の中でとらえ返さなければならないと指摘する (Bourdieu, 1977)。特に、専門家がインタビューなどを通じて研究者に伝える説明や語りに関しては非常に懐疑的な目を向けるのである。これは、技法として定着した技能を実践者が外部に向けて言葉でもって説明するというのは非常に難しいというブルデューの見方がある。無論、ある技能、例えば、チェスやバイオリンといった技能を習熟した実践者は自らの技能を自分自身の独自の理論に基づき説明することは可能であるが、その独自の理論は必ずしも彼らの実践を客観的に捉えたものではない。このような習熟した実践者が自らの技能を十分に説明しきれないという点を持ってブルデューは「知恵ある無知 (ドクタ・イグノランチア)」として批判的に記述している。このような当事者の聞き取りに基づく「語り」を軽視するという人類学の中での当時の風潮は決してブルデューだけに帰せられるものではないにせよ (福島, 1992)、専門家の技能を捉える際に、聞き取りや当事者の語りに関するデータは「誤認」や「錯認」を含みうるとして位置づけが極めて低く追いやられていたのであり、行為の「真の」原因は観察者が客観的に外から観察することで初めて明らかになると想定されていたのである (福島, 1992・1993; 田辺, 2003)。

2. 状況に埋め込まれた認知という視座

ブルデューはモースの身体技法では極めて簡素にしか触れられていなかったハビトゥスのアイデアを改めて深く捉え直し、新たに実践を捉える枠組みを提示している。しかし、ブルデューの指摘ではハビトゥスが身体の中で再生産されるということが言及されているが、一方で、いかにハビトゥスが実践を通じて身体の中に構築されていくのかというプロセスを明らかにすることはできておらず、行われた実践の結果のみに焦点が当てられてしまっているという批判がなされている (Bloch, 1989; セルトー, 1987)。

そもそも、ブルデューがハビトゥスにおける獲得プロセスを明示できていないという批判は人類学の本質主義という問題が根にある。本質主義とは「オリエン」や「イスラーム」、「日本文化」といったカテゴリーがあたかも自然種のように全体的で固定された同一性を有することを自明の前提にしている立場のことを

指す (小田, 1996; 大村, 2002)。これまで人類学者はこの本質主義に沿って、文化や民族を同質的に描くという行為を行ってきた。このような本質主義に対して、人類学者があたかも文化というものを実体であるのかのように描きだしてきたその作業を極めて激しく批判が行われてきた (サイード, 1986; クリフォード & マーカス, 1996)。議論をブルデューに戻すと、文化を同一種のように描くという主張は個人をあくまで社会の中の一アクターとして措呈してしまい、結果として文化と個人の関係というのは十分に研究されてこなかったのである。このように、ブルデューだけでなく、1980年代以前の人類学においては個人が発達していくに従って、どのように当該の文化を獲得していくのかというプロセスは十分に明らかにされてこなかったといえよう (レイヴ, 1988)。

このようなブルデューに対する批判、あるいは本質主義に対する批判に関して一つの解決案として考えられている理論的視座が正統的周辺参加 (Legitimate Peripheral Participation: 以下、LPP) である (大村, 2002)。LPP とは学習主体の行為の変化 (熟達化) を「実践コミュニティ」に対する参加の軌跡の中で捉えることで、学習を共同体へのコミットメントの変化というマクロな視点から明らかにしようとするものである (Lave & Wenger, 1991)。LPP では「参加」という概念を学習の中心におくことを通して、学習を極めて社会的なものに転換することに成功しているといえよう (高木, 1996; 福島, 1993)。

このLPPの視座をハビトゥスの獲得プロセスを解明するための理論的視座として措呈するのである。例えば、田辺によるタイの民間療法師の仕事を通じた技能伝承の分析が挙げられよう (田辺, 1999・2003)。田辺は民間療法師が治療の行われる場において言葉や身体動作のやり取り、そして、民間療法師との協働によって弟子が実践コミュニティに内在する技法を学んでいく様子を捉えている。弟子はコミュニティの中で周辺の参加から十全的な参加へ参加の度合いを変化させと移行していくことを通じて、コミュニティの中に内在する技能に新たな意味を付加しつつ獲得していくとして捉えられるのである。

このように正統的周辺参加という視点を導入することで、ブルデューのハビトゥス論では欠けていた発

達の視点を導入することに成功している。そして、同時に個を中心として、文化をどのように獲得していくのかという発達の視点から捉えるという新たな視座を提示しているのである。

3. モースおよびブルデューの系譜の批判

さて、ここまでモースの身体技法およびブルデューのハビトゥス論の深化の過程を捉えてきた。しかし、技能の次世代への伝承という観点から考えたときに、二つの流れともにそれぞれ不十分な側面があると言わざるを得ないであろう。それは、一つが未来への視点が十分ではないという点であり、もう一つに当事者の視点が十分ではないという点である。

モースの身体技法のひとつの発展形として金子の物質文化と身体技法の関係を問う新たな研究があることを上げた。この研究では親世代、娘世代に対してインタビューを行い、それぞれの世代ごとにどのような社会・文化的な変化があり、技能の変容が起きたのかということを明らかにしていた。しかし、親世代であれ、娘世代であれ、技能を伝える側となった成員が「次の世代にどのように受け継いでほしいと意味づけているのか」という観点からは十分に分析できていない。金子の研究ではあくまで二つの過去の習得に関するライフストーリーを分析するのみで、擬似的に二つの世代を結び付けているにすぎない。無論、二つの世代が親子で、長い時間同じ時間を共有してきたのは間違いない。しかし、親世代は自らどのように将来世代に受け継いでほしいと意味づけており、そして、その意味づけを子世代はどのように継承しているのかという意味づけの次元での継承という点に踏み込んで論述されているわけではないのである。

金子の研究では二つの世代の連続性を自明のものとして捉えられているが、子世代の採用する変化が場合によっては親世代から見れば、進歩ではなく、後退として捉えることも可能であろう。つまり、金子の研究はあくまで親世代と子世代を点と点で結んだだけであり、その点と点はどのような傾き（進歩なのか、後退なのか）という点に関しては触れられていないのである。

また、ブルデューの系譜に関しても、LPPに代表されるように、実践という視座を学習という観点から捉

え直すことにより、ブルデューではほとんど触れられていなかったハビトゥスの獲得プロセスに焦点を当てることに成功している。しかし、周辺的に参加をし、十全的参加者となった「学習者」がどのように次の世代に自らの技能を伝えようとするのかという伝承に関する視点に関して、十分に焦点は当てることができているとは言い難い。そもそも、ブルデューのハビトゥスの系譜では当事者の視点は過小に評価されている。そのため、当事者の「意味づけ」というフレームワークは基本的には考慮されていないのである。

先にモースの身体技法に関する研究を紹介していく中で、技能に関する人類学研究が進化論的視点と、文化相対主義的な視点に分断されてしまい、十分に研究されてこなかったということを指摘した。そもそも、双方の立場ともに、文化を受け継ぐ当事者から離れて進化を論じることができるという意味においては共に共通する土台の上に寄って立っている。しかし、一度、進化を論じる視点を、文化を受け継ぐ当事者に戻した時に、当事者が次の世代、あるいはそれ以降の世代に抱く希望や想いであるし、次世へそのような希望や想いを伝えるという試みに他ならないであろう。

このように二つの技能を捉える人類学における系譜はともに、当事者の未来に関する視点、より具体的に言えば、次の世代にどのように受け継いでほしいと考えているのかという当事者の視点から捉える進歩に関する視点が欠けていると言えるのである。

4. 人類学における「未来」に関する視点

ここまで見てきたように、人類学において技能研究は極めて広範な広がりを持って研究されてきた。しかし、一方で、次世代にどのように自らの技能を受け継いでほしいと意味づけているのかという技能と次世代への継承に関する研究に関しては十分に研究が着手されているとは言い難いのが現状であろう。

特にこれまで人類学、あるいは社会科学における研究では主として過去に焦点が当てられてきており、未来に向けた研究が少なかったことはすでに指摘されている（Munn, 1990 : Wallman, 1992）。近年ではこのような批判を受け未来に焦点を当てた研究もなされはじめてきた。例えば、宮崎はプロッホによりながら、希望という視座を人類学の中に導入する試みを行っている。

宮崎はフィジーのスヴァヴォウという村においては希望がどのように過去から現在に足るまで繰り返されてきたのかということを明らかにしている。スヴァヴォウの人々は植民地時代、当時の政府によってわずばかりの地代で強制移動をさせられた。スヴァヴォウの人々はその後、手を変え、品を変え、補償金の増額を要求してきたが、当時の政府はスヴァヴォウの人々を無知として切って捨ててきた。このスヴァヴォウの人々が希望を持ち、そしてその希望が過去と交錯しながら、最終的には希望が崩れるということの繰り返しを経ながら尚もスヴァヴォウの人々は希望を持つということが示されているのである。宮崎の研究が非常に興味深いのは、単に希望を未来に向けての語りを捉えるための手段として考えるのではなく、知識の一樣態として捉えるという点にある（宮崎、2001・2009）。

宮崎の研究はこれまで過去と現在を結ぶ人類学の研究の流れの中で未来という視座を導入し、かつ、希望という新たな人類学の分野を位置づけようとする意味において非常に挑戦的であり、意欲的な研究といえる。しかし、宮崎のフィジーのエスノグラフィーではスヴァヴォウの人々が希望をもち、そして崩れるということの繰り返しを行っている様子が基本的には一つの集団として同質的に描かれている。また、希望を扱ってはいるが、宮崎の射程はあくまで過去においてどのように希望は扱われてきたのかという視座を提示しているのみで、現在から未来へと至る過程を扱っているわけではない。無論、近年の宮崎によるトレーダーの希望に関する研究は、まさにまだ起こっていない未来を対象としたものである（Miyazaki, 2003・2006）。しかし、あくまで対象とする時間としてはトレーダーのこれから生きるであろう時間のみを対象にしている、すなわち、次世代という視座は極めて弱いといわざるをえないのである。

世代という視座を導入した際にはブロッホの言う「まだーない」というのは世代を通じて繰り返されるとして捉えることができよう。すなわち、先行世代が築き上げたが、より先があるものとして捉えた「まだーない」という視座を当事者が受け継ぐ。当事者は技能を洗練させ、より高みに行くが、そこでも「まだーない」であり、それを後続世代に託す。このように世代を通じて先行世代の有する「まだーない」という

技能に関する視座を受け継ぎ、そして自らが洗練させつつ、次の世代に伝えていくという伝承者を中心に置き、そこから過去—現在—未来を技能という観点から結び付けていくということがまさに求められていると考えられるのである。

5. 終わりに

ここまで技能に関する二つの系譜、モースの身体技法に関する系譜、そして、ブルデューのハビトゥスに関する系譜、そして、最後に人類学において新たに立ち表れている未来、あるいは希望に関する研究を取り上げてきた。しかし、現状はいずれにおいても技能という観点からは当該の共同体において受け継がれた技能を当事者がどのように学び、そして次の世代にどのように伝えようおとしているのかという先行世代—伝承者—後続世代という世代間の関係性を軸にしたような人類学的な研究が十分に行われていないことが明らかとなった。

希望にせよ、未来にせよ、ここまで見てきた技能研究においてまさに必要な視点とは世代から独立した個をターゲットとして過去—現在—未来の関係を問うのではなく、むしろ、先行世代と後続世代という世代の中に埋め込まれた存在として個を捉え、その中で次世代に向けてどのような知識を残そうとするのかという世代と世代をつなぐ動的なものとして技能を捉えようとする試みに他ならないのである。このような世代と世代をつなぐ試みの重要な方法の一つが教育なのであり、次世代に向けた語りにほかならない。

参考文献

- Bloch, M. (1989) 『Ritual, History and the Power: Selected Paper in Anthropology』 London: Athlone
- Bourdieu, P. (1977) 『Outline of a Theory of Practice』 New York: Cambridge University Press
- ブルデュー, P. (1988) 『実践感覚Ⅰ』 東京: みすず書房
- セルトー, M. (1987) 『日常実践のポイエティック』 東京: 国文社
- Crossley, N. (1995) 「Body Techniques, Agency and

- Intercorporeality: On Goffman's Relations in Public」
『Sociology』 29(1), pp.133-149
- クリフォード、J., & マーカス、J. (1996) 『文化を書く』
東京：紀伊国屋書店
- 福島真人 (1992) 「説明の様式について」『東洋文化研
究所紀要』 116, pp. 295-pp. 360
- 福島真人 (1993) 「野生の知識工学」『国立歴史民族博
物館』 51, pp. 11-43
- 福島真人 (1995) 『身体構築学』 東京：ひつじ書房
- Harris, M. (1968) 『The Rise of Anthropological Theory』
New York: Crowell
- Igold, T. (1997) 「Eight Themes in the Anthropology of
Technology」『Social Analysis』 41(1), pp.106-138
- イリイチ, I. (1977) 『脱学校の社会学』 東京：東京創
元社
- 生田久美子 (1987) 『「わざ」から知る』 東京：東京大
学出版会
- 金子守恵 (2007) 「エチオピア西南部における土器職人
のテクノ・ライフヒストリー」後藤明編『土器の民
族考古学』 pp. 15-25, 東京：同成社
- 金子守恵 (2008) 「手指を使って土器をつくる」菅原和
孝編『身体資源の共有』 pp. 126-155, 東京：弘文堂
- 川田順造 (1988) 「身体技法の技術的側面」『社会人類
学年報』 vol. 10, pp. 1-41
- 川田順造 (1995) 「基層文化としての身体技法」川田順
造編『ヨーロッパの基層文化』 pp.177-203, 東京：
岩波書店
- 川田順造 (1997) 「伝統的技術の中の身体技法」川田順
造編『ニジェール川大湾曲部の自然と文化』
pp. 317-358, 東京：東京大学出版会
- レイヴ, J. (1988) 『日常実践の認知行動』 東京：新曜
社
- Lave, E., & Wenger, J. (1991) 『Situating Learning :
Legitimate Peripheral Participation』 Cambridge :
Cambridge University Press
- Lock, M. (1993) 「Cultivating the Body: Anthropology and
Epistemologies of Bodily Practice and Knowledge」
『Annuaire Review of Anthropology』 22, pp.133-155
- ルロワ=グーラン, A. (1973) 『身振りと言語』 東京：
新陽社
- 宮崎広和 (2001) 「方法としての希望」『社会人類学年
報』 27, pp. 35-55
- 宮崎広和 (2009) 『希望という方法』 東京：以文社
- Miyazaki, M. (2003) 「Temporalities of Market」
『American Anthropologist』 105(2), pp.255-265
- Miyazaki, M. (2006) 「Economy of Dream」『Cultural
Anthropology』 21(2), pp.147-172
- モース, M. (1976) 『社会学と人類学Ⅱ』 東京：弘文堂
- Munn, N. (1990) 「Constructing regional worlds in
experience: Kula exchange, witchcraft and Gawan local
events」『Man』 25, pp.1-17
- 野村雅一 (1999) 「「身体技法論」へのノート」野村雅
一編『技術としての身体』 pp. 25-42, 東京：岩波書
店
- 小田亮 (1996) 「ポストモダン人類学の代価」『国立民
族学博物館研究報告』 21(4), pp.807-875.
- 大村敬一 (2002) 「本質主義的な記述を乗り越えるため
に」『文化人類学研究』 3, pp.76-100
- サイード, E. (1993) 『オリエンタリズム』 東京：平凡
社
- 高木光太郎 (1997) 「実践の認知的所産」『認知心理学
5<学習と発達>』 pp. 37-58, 東京：岩波書店
- 田辺繁治 (1997) 「自己統治の技法：北タイのエイズ自
助グループ」『上智アジア学』 17, pp. 119-145
- 田辺繁治 (2003) 『生き方の人類学』 東京：講談社
- Wallman, S. (1992) 『Contemporary futures : Perspectives
from the Social Anthropology』 London: Routledge
- White, L. A (1959) 『The Evolution of Culture』 New York:
McGraw Hills
- 柳治男 (2005) 『<学級>の歴史学』 東京：講談社

(博士後期課程)